拾遺和歌集

卷第七

物名

火ぼしのおゆ藤原すけみ

雲まよひほしのおゆくと見えつるは

蛩のそらにとぶにぞ有りける

卷第九

雑下

身のしづみけるをなげきて、勘解由判官にて 源したかふ

あらたまの年のはたちに たらざりし時
はの山の山さむみ 風もさはらぬ ふぢ衣
ふたたびたちし あさぎりに 心もそらに
まどひそめ まなしご草に なりしより 物
思ふことの 葉をしげみ けぬべきつゆの
よるはおきて 夏はみぎはに もえわたる

ほたるをそでに ひろひつつ 冬は花かと
見えまがひこのもかのもとに ふりつもる
雪をたもとにあつめつつ ふみみていでし
道は猶身のうきにのみ 有りければここ
もかしこも あしねはふしたにのみこそ
しづみけれたれこのつのさは水にな
くたづのねを 久方のくものうへまでか
くれなみたかくきこゆる かひありてい
ひながしけん 人は猶かひもなぎさにみ
つしほの世にはからくて すみの江の松
はいたづら おいぬねど みどりの衣ぬぎ
すてむ はるはいつとも しらなみの なみ
ぢにいたく ゆきかよひ ゆもとりあへず
なりにける 舟のわれをし きみしらばあ
はれいまだにしづめじとあまのつりなは
うちはへてひくとしきかば 物はおもはじ

世の中をおもへばくるし わするればえ
もわすられず たれもみな おなじみ山の
松がえと かるる事なく すべらぎの ちよ
もやちよも つかへんと たかきたのみを
かくれぬの したよりねざす あやめぐさ
あやなき身にも 人なみに かかる心を思
ひつつ 世にふるゆきを きみはしも 冬は
とりつみ 夏は又 草のほたるを あつめつ
つ ひかりさやけき 久方の 月のかつらを
をるまでに 時雨にそほち つゆにぬれへ
にけむそでの ふかみどり いろあせかたに
今はなり かつしたばより くれなるにう
つろひはてん 秋にあはば まづひらけなん
花よりも こだかきかげと あふがれん物
とこそ見し しほがまの うらさびしげに
なぞもかく 世をしも思ひ なすのゆのた
ぎるゆゑをも かまへつつ わが身を人の

身になして おもひくらぐよ ももしきに
あかしくらしてと「夏の くもるはるけき
みな人におくれてなびく 我もあるらし

「国歌大観」より